

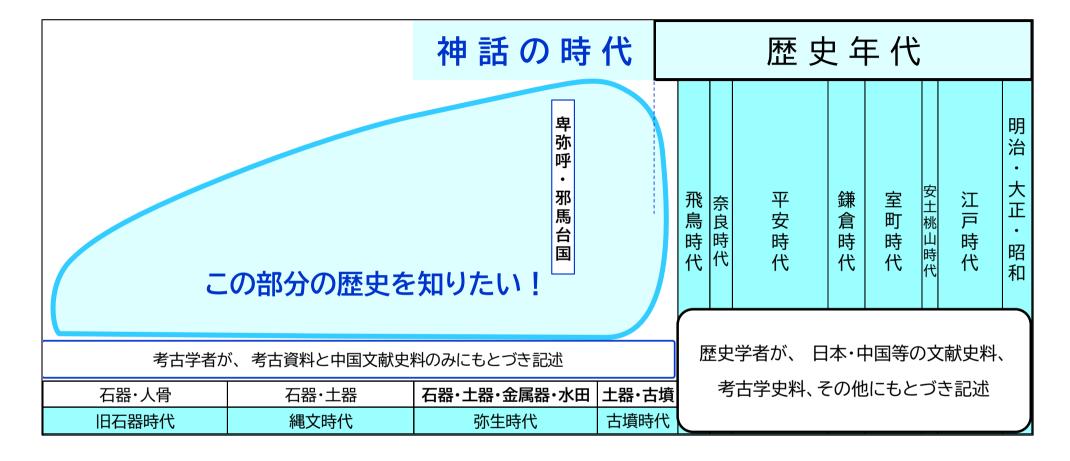
日本古代史ネットワーク 講演会「日本海の神々」

# 日本海ルートと出雲族繁栄の歴史



2022年11月5日(土) 丸地三郎

### 日本の古代史に欠けているもの



- 古墳時代以前は、考古学者が、 考古資料と中国文献史料のみにもとづき記述
  - 卑弥呼・邪馬台国以外は、個人名が無い。 人の活躍が判らない歴史となった。
  - 石器/土器/家屋/青銅器/鉄器などが主役。 人は主役でない歴史。
- 第二次世界大戦の反省から歴史も見直された。
  - 官憲の追求をものともせず、真理を求めた津田左右吉氏は高い評価を得た。
  - 「神話」は否定された。
    - 歴史学者は、否定された神話の時代を取り扱わないことが続いた。
- 戦後75年たっても、歴史学者は「神話の時代」は取り扱わない。
- 歴史学者が、誰も調べないなら、誰かが調べるしかない。 在野の私達が、まず、調べてみよう!

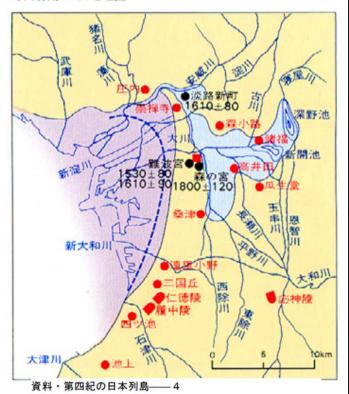
### 神武東征が否定された理由

- 歴史学者津田左右吉氏が、神武東征を疑問視する材料となった白肩津・楯 津の地は、現在、大阪平野の海から遠く離れた所にあります。
- ・ 津田左右吉の古代史批判で、船で来て楯津・蓼津で上陸したと云うのは、 虚偽と決め付けたが、現在の地図を見ると、実証的で納得します。
- しかし、古地図が復活すると、そこには、海があり、上陸に適した土地でした。 逆に、古事記・日本書紀が真実を記した証拠となりました。

C.河内潟の時代〈約3000-2000年前・縄文時代晩期-弥生時 代前半〉の 古地理図



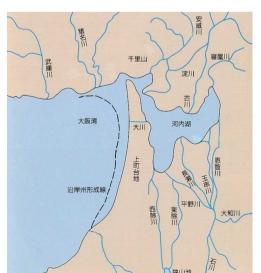
D.河内湖 I の時代〈約1800-1600年前・弥生時代後期-古墳 時代前期〉の古地理図



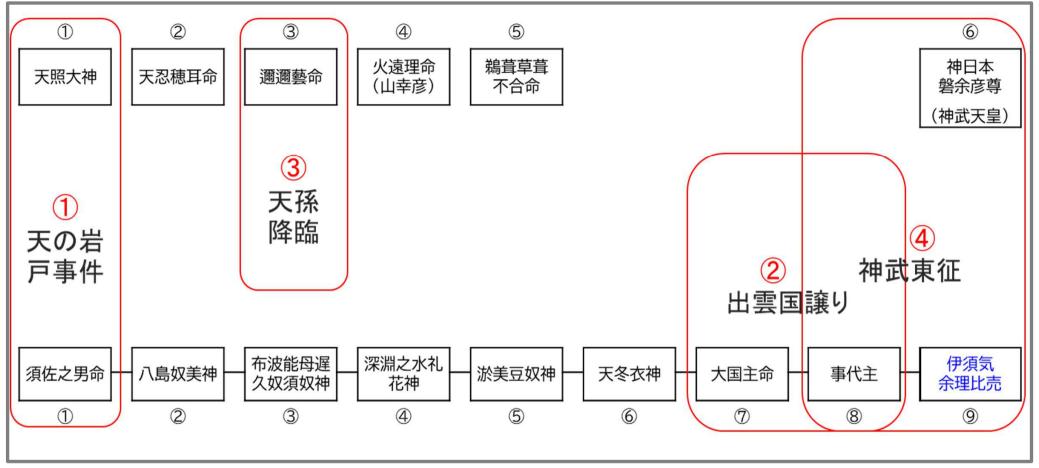
### 大阪層群と大阪平野

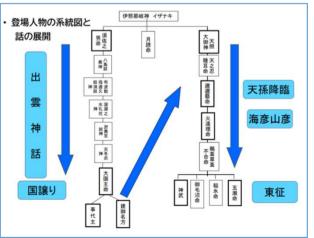
市原実=大阪市立大学理学部助教授





### 古事記・日本書紀を歴史として読む

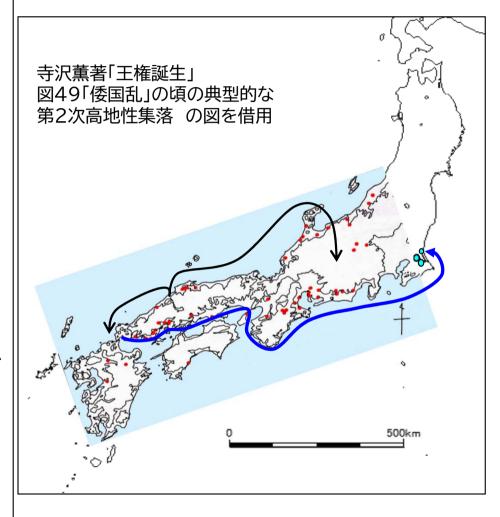




- 古事記・日本書紀の神話の書かれた順番は、
  - ①天岩戸事件②出雲の国譲り③天孫降臨④神武東征
- 各事件の登場人物と親子関係を記すと順番が合わないことが判る。
  - 神話の話の順序と実際の事件の発生順は違うことが判る。
- 歴史として読む場合は、時系列の順に理解して読むことが必要。
  - 出雲国譲りの前後を検討する。

### 事件の順番が判明すると、出雲の国譲りと神武東征に注目

- 武甕槌神・経津主神は、高天原に呼び出され命を受ける。
  - 出雲へ行き、国譲りの談判を行う。
  - 建御名方を追い長野県・諏訪まで行き、降伏させ、
  - ・ 出雲に戻り、国譲りで実現し
  - その結果を高天原にもどり報告。
  - 出雲の久那斗神を道案内人として、領土を受け取るために、人員を率いて、東端の鹿島・香取まで、行き住み着いたものと推測する。
- 神武東征の開始の描写を見てみよう。 東征の物語は、会議から始まる。
  - ✓ 古事記 : 「いずこに坐さば、平けく天の下の政を 聞こしめさむ。なお東に行かむ。」
  - ✓ 日本書記:『東に美き地有り。青山四周(ヨモニメグレリ)。(中略)彼の地は、必ず以て大業(アマツヒツギ)を恢弘(ヒラキノ)べて、天下に光宅(ミチオ)るに足りぬべし。蓋し六合(クニ)の中心か。
- 会議の目的は、遷都先の選定 → 大和
- ここで気になるのが、出雲の国の大きさ。



### 埋納された青銅器の分布

出雲の考古学と『出雲の風土記』に収納 松本岩雄著 3章「出雲の青銅器」 「弥生青銅器の生産と流通―出雲地域出土青銅器 を中心として―」

✓ 大量の銅鐸・武器型青銅器が、出雲(加茂岩倉・ 荒神谷)で出土。共に、出雲族の祭器と判明

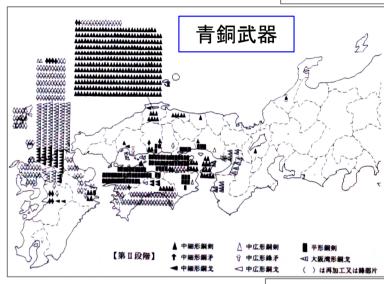


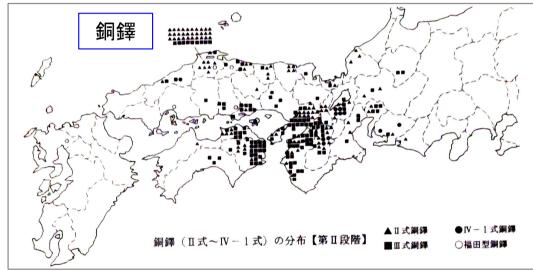
第一段階



第二段階











第三段階 弥生後期

## 青銅祭器は 金色



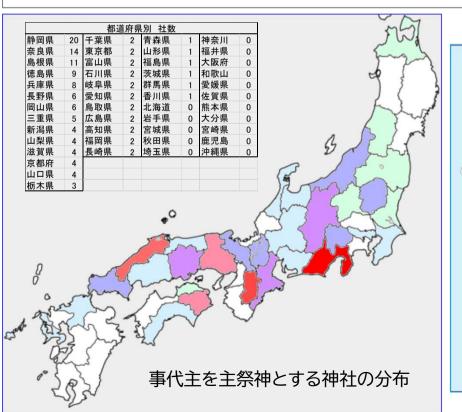
- 銅鐸・武器型青銅器は、使用時には、生来の金色。
  - 青銅色は、腐食し、退色した色。
- ・ 写真は下記より
  - 東京国立博物館「出雲と大和」特別展の展示
  - 出雲観光ガイドの島根県律古代出雲歴史博物館より借用

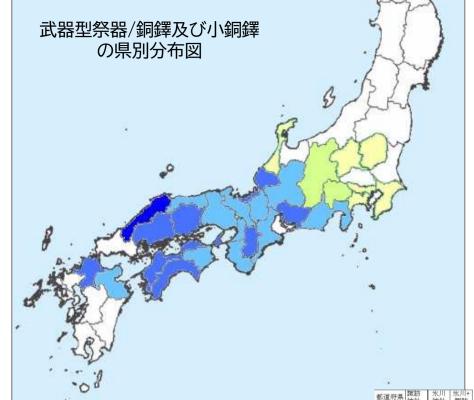


### 出雲の勢力圏

# 青銅器埋納の分布図と出雲系主祭神の神社分布図

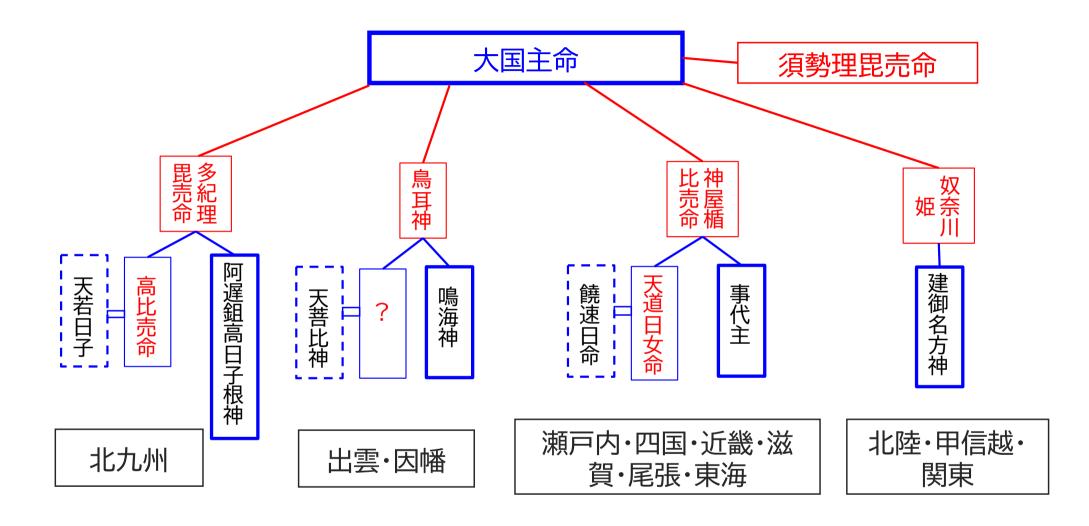
- · 青銅器埋納は、出雲族の分布を示す。
- ・ 大国主命を主祭神とする氷川神社と、子の建御名方神を 主祭神とする諏訪神社の分布、そして、同じく子の事代主 を主祭神とする神社の分布は、出雲族の勢力範囲を示す ものと言える。
- · 青銅器埋納の分布図と出雲系主祭神の神社分布図の両 方から、出雲族の勢力範囲が推定できる。
- ・ 北九州から、東北までの広い範囲が出雲圏であったことに驚く。







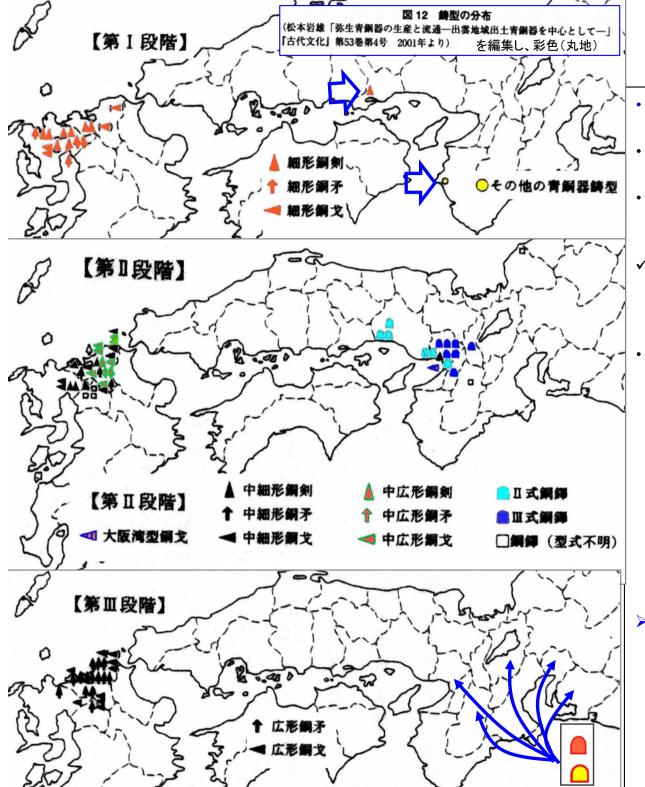
### 4人の息子達の分担地域



- 大国主命は各地に180人の子供を作り、子孫をベースに、支配体制を安定化させたと云われる。
- 大国主命は、出雲圏を全国に拡大にしたが、各地域は、主だった(記紀などに名前の残った)子供達に委せたように 推測できる。
  - その地域と担当した子息達は上記の通り。
  - 天孫族との政略結婚によって、勢力拡大と安定支配を達成したように推測する。

### 出雲族の祭器:青銅器の生産

- 出雲族が、銅鐸・武器型青銅器を祭祀などに使用してきたが、その生産は何処で行われたのか?
  - 生産地の特定は、鋳造の為の石型の出土で特定してきた。
    - 生産地は、北九州が中心で、須玖岡本遺跡付近や吉野ヶ里など、三種の神器を副葬 する天孫族の地域で行われた。
  - 第II期には、
    - 北九州の一部生産地域を出雲族が占拠し、支配したように見える。 (戦争遺跡の分布から)
    - 吉備や大阪(河内)でも生産が開始され、出雲族も生産開始したことになる。 (技術と原材料の移転を実行したものと推測)
  - 第III期にも、
    - 北九州での生産が多い。
    - 一部の地域は、出雲族が支配し、一部は天孫族が支配を続けたと推定。
- 貴重な青銅製祭器を出雲族は、天孫族から入手
  - 何を対価としたのだろうか?



### 青銅器の生産

- ・ 鋳型の出土から生産地を割り出すと、北九州に集 中していることが明らか。
- 第一段階では、吉備(岡山)と和歌山でも生産移転 が行われた。
- ・ 第2段階に入ると、銅鐸の鋳造が吉備(岡山)で行われ、河内(大阪)で拡大する。しかし、その他の青銅器の生産は相変わらず北九州に集中。
- 戦争遺跡の集中する北九州で、相変わらず出雲族が使う青銅器が生産されたことは、出雲族が、軍事的優勢を保ち、生産地の一部を、占拠し、支配していたとも理解できる。
- 第3段階では、青銅製武器は、北九州で相変わらず生産継続。青銅器の一部生産地を出雲族が支配し続けたものと見る。
  - 銅鐸に関しては、松本岩男氏の図にはないが、近畿圏での鋳型の出土があり、生産が続いたと見る。
  - 弥生時代後期になると大和や摂津のほか、 近江、尾張などの拠点集落からも土の鋳型 が出土していることから、より広い範囲で銅 鐸や青銅器生産が行われるようになります。 野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)より引用
- ▶ 青銅器製造は、北九州の天孫族が行っていたが、 第II段階から、出雲族も行い始め、出雲族の生産 比率が高くなった。

### 出雲で力を持ち始めた出雲族の課題

- 北九州を追われた須佐之男命が出雲に定着し、力を付け、徐々に周辺地域に支配地域を拡大した。その拡大に使 われたのは、武器型青銅祭器とみられる。青銅の祭器は、青く錆びた色ではなく、黄金色に輝くもので、色とりど りの錦で飾ると、その美しさ、豪華さは、侵攻する支配者の権威付けにもなる。
  - 日本書紀には、大国主命は、国を平らげた時に広矛を使ったと記している。
- その美しい青銅製の剣や矛は何処で、誰が作ったものか?
  - 遺跡・遺物から見る限り、天孫族が主に博多平野で、特に須玖岡本で 鋳造されたもの。
    - 出雲族は、天孫族から 武器/祭器の供給を受けていた。 その代価は、何?

須玖岡本干墓副葬品

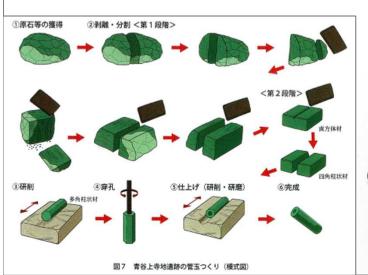


吉武高木遺跡3号木棺慕より

- 天孫族は、
  - 豊かで、鉄や青銅器を作り、青銅器は死者に供えて副葬していた。
  - それと共に、副葬していたものは、青銅製の鏡の外に、勾玉・管玉が有った。
  - 勾玉・管玉を天孫族は、大変珍重していた。
- 出雲族が、青銅器の代償として、天孫族に提供していたものは、何か?
- 勾玉は日本海側のある地域からだけ原材料が産出し、その加工技術が管玉の製造に使え、原材料の石 は、日本海の複数地域で算出した。
  - この勾玉・管玉を大量に生産し、提供すれば、青銅器・鉄器が購入でる。
    - 自分たちにとっても貴重なコメ・農産物などを無理やり集めて提供することが無くなる。
- 出雲族は、鉄・青銅器を得るために、装飾品などの産業を必要としていた。

### 翡翠(ヒスイ)と管玉の加工技術

- ヒスイの産地は、日本海岸の糸魚川市で産出。
  - ・・・その外、日本の複数の地域でも産出するが、装飾品としての価値のあるヒスイは糸魚川産のみ。
- 古代中国でも硬玉と云われ珍重されたが、その産地は糸魚川。
  - ・ 昭和時代に入るまで、糸魚川産であることが忘れられ、ミャンマー産とか、朝鮮半島産と云われたが、誤りだった。 現在のヒスイの主産地はミャンマー。
- ・ ヒスイの硬度は、モース硬度: 6.5 7 極めて加工が難しい。
- 日本では、縄文時代からヒスイに穴を開け、飾りものとして使われ、日本各地から出土する。
  - 加工方法は、ボール盤のように、棒状のものを、垂直に下ろしながら、回転させる。
  - ヒスイとの接触面には、砥石を含む液体を流し、研磨することで穴を開ける。
  - ・ 加工が長時間に渡り、その間、垂直性と回転を保つことは 現在の工作機械の精度レベルが要求される。
  - 管玉も、石の丸棒を作り、2mmの直系の面に1mmの穴を 丸棒の長さ分垂直に加工する。
    - この加工技術は、ヒスイ穴明け加工技術が適用できる。
    - ・ 現在の考古学では技術器具は未発見。



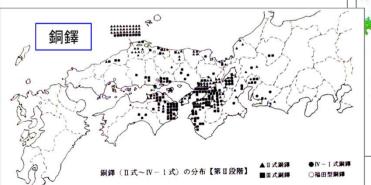


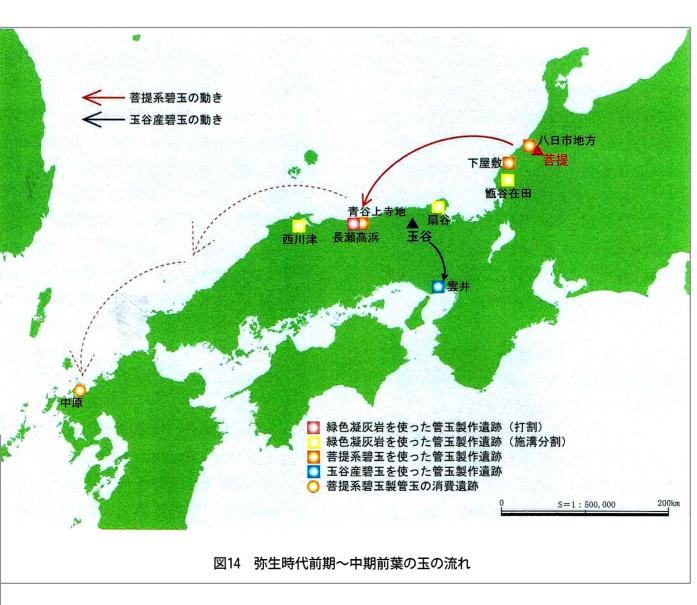
茅野市尖石縄文考古館 展示品

### 弥生時代 前期~中期前葉までの流れ

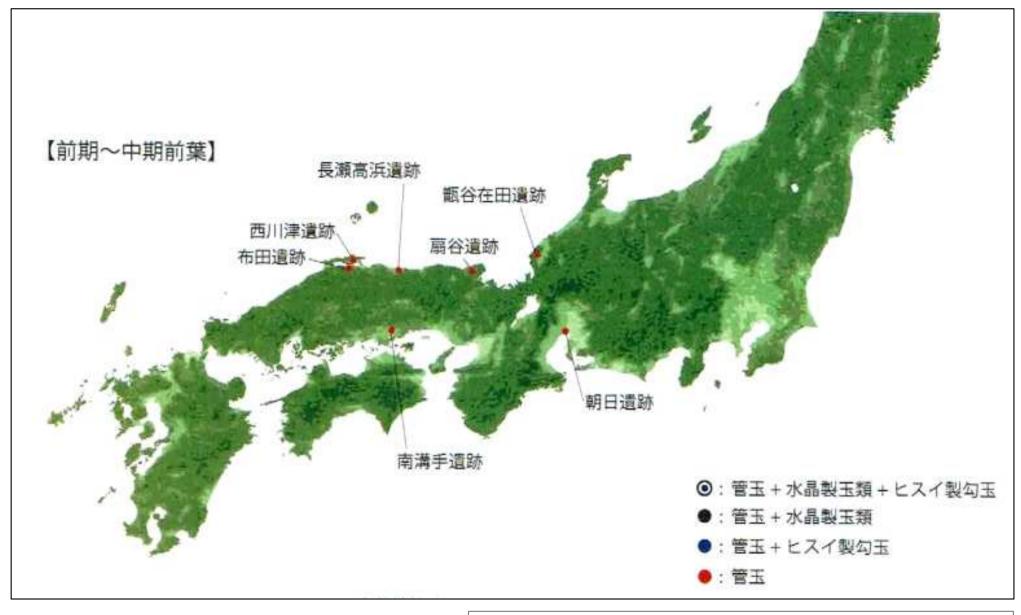
日本海を行き交う弥生の宝石 ~青谷上寺地遺跡の交流を探る~ 青谷上寺地遺跡フォーラム2013の資料 鳥取県埋蔵文化センター

- ・ この時期から、八日市地方遺跡 と青谷上寺地遺跡は、既に主要 な拠点であったことが判る。
- · これらの拠点で取り扱われたの は管玉。
- 勾玉は、出てきていない。
- · この時期の後に、大国主命の時代に入ると思われる。





### 管玉・勾玉の生産地 (弥生前期~中期前葉)



日本海を行き交う弥生の宝石 ~青谷上寺地遺跡の交流を探る~ 青谷上寺地遺跡フォーラム2013の資料 弥生時代における玉造の展開 米田克彦著

### 完成した勾玉・管玉の生産・加工・流通ルート

日本海を行き交う弥生の宝石 ~青谷上寺地遺跡の交流を探る~ 青谷上寺地遺跡フォーラム2013の資料 鳥取県埋蔵文化センター2013

・ 糸魚川のヒスイや複数の管玉の原材料産地と加工・流通の経路を、まとめて提示したのが、右の書物とその中の図。

八日市地方遺跡 と青谷上寺地遺 跡が、加工と流 通の拠点で最終 消費地九州への ルートがきれい に示されている。

全体像は画期的な 提示。幾つか異論 が示されているが。



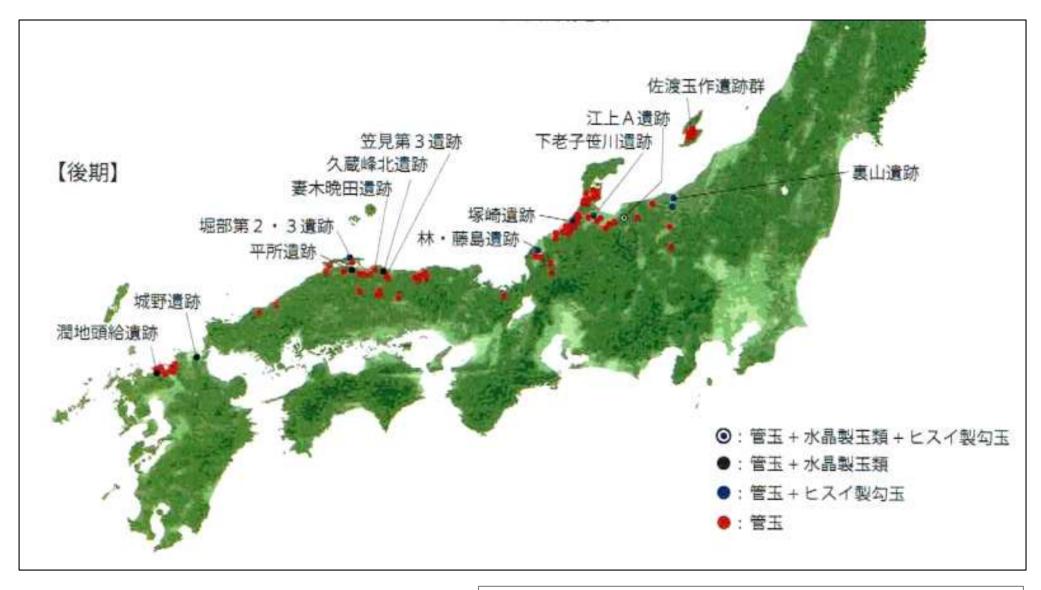
### 管玉・勾玉の生産地 (弥生中期中葉~後葉)



#### 日本海を行き交う弥生の宝石 ~青谷上寺地遺跡の交流を探る~

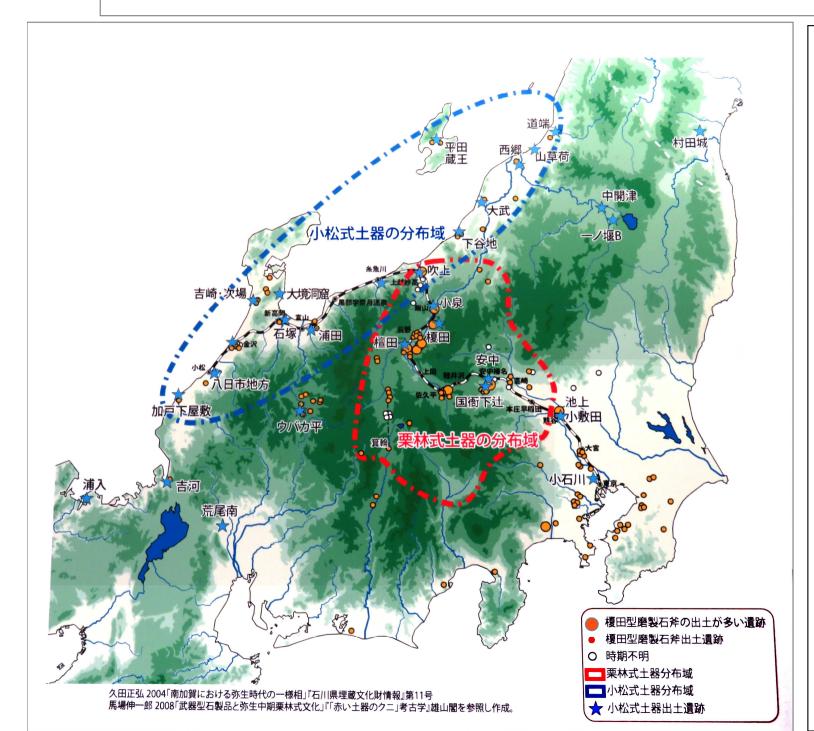
青谷上寺地遺跡フォーラム2013の資料 弥生時代における玉造の展開 米田克彦著

### 管玉・勾玉の生産地 (弥生後期)



日本海を行き交う弥生の宝石 ~青谷上寺地遺跡の交流を探る~ 青谷上寺地遺跡フォーラム2013の資料 弥生時代における玉造の展開 米田克彦著

### 小松式土器・栗林式土器の分布図



- 八日市地方遺跡は小 松市にある。
- この小松式土器は、 新潟まで日本海側まで広がる。
- 後に会津まで広がった。
- 長野の横田式石斧は 重用されたようで、地 方遺跡など北陸でも 使われ、関東一円で 使用された。
  - 北陸と長野は、対立しない地域であることを示し、それが関東平野まで広がっていたことを示す。
  - 諏訪神社の分布 の広がりにもつなが りが感じられる。

### 関東への進出

- 大国主命・出雲系の関東地方への進出は、少なくとも、2回あったと考えられる。
- ・・初回は、東遠江の菊川系土器・山中系土器などを持参し、大宮台地・武蔵野台地などへ、船で来た。
  - · 関東で発掘された土器は、荒川下流域「弥生町」式土器などの名称で記録される。
  - この時は、人の居住の希薄な地域を選んで、入植し、居住地域を広げた。
  - 当初は、環濠集落を築くなど、戦闘もあったはずで、力ずくの侵入もあったものと想像する。
  - ・ 北関東へも広げ、更に東北地方まで入植地域を広げた。天王山式土器・アメリカ式石鏃の一族が広がる。
- ・・土器など遺物からは不明だが、神社の祭神からは、味耜高彦根神などの関東地方訪来が覗える。
- 大国主命が建御名方神などを同伴して、又は、建御名方神が単独で、関東へ侵入。
  - ・ 侵入ルートは、諏訪神社の連なる地域で、右下の図の陸上ルート及び、土器の示す海上ルート。
  - ・ 東海西部(伊勢、三河、美濃地方)のパレス・スタイル壺などをもって、海上交通によって、侵入。

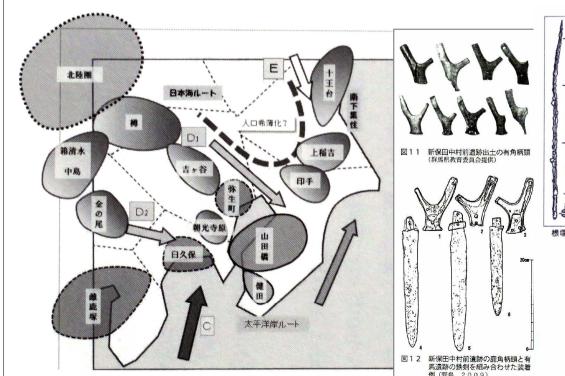


図21 弥生後期後半の動向

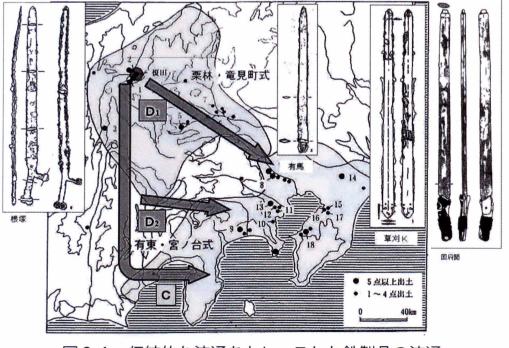
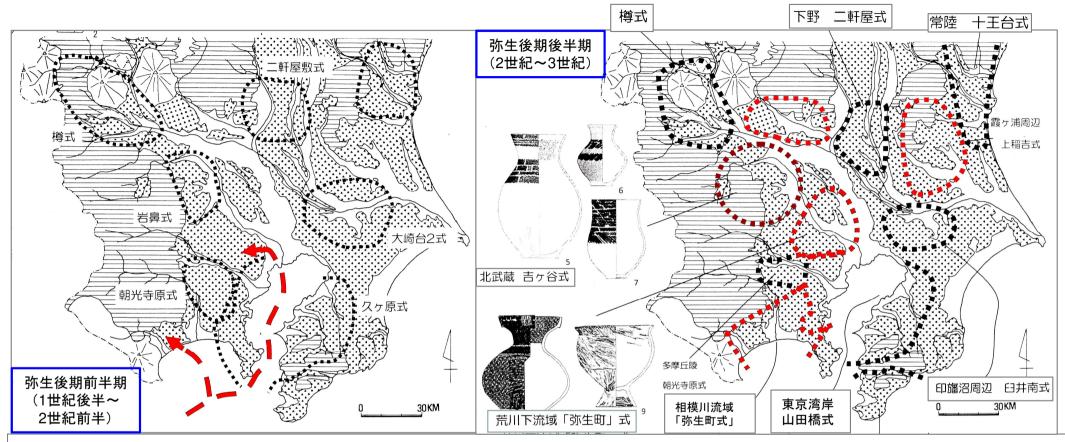


図24 伝統的な流通をトレースした鉄製品の流通 (馬場2001を改変)

### 土器から見る外部勢力の関東への侵入



- ・ 平成26年度「さきたま講座」考古学講座②弥生時代の北武蔵 柿沼幹夫講演会資料2014/06/14より
  - ・ 弥生後期前半期 武蔵野台地・大宮台地や相模川流域は、遺跡の希薄地で、その間隙をぬって、 東海地方から人々が集団移動してきた形跡が窺える。その手段は水上交通で、東京湾から中小河川 を遡るものであった。
- ・ 丸地記 : 後期後半の図では、「隙間」の部分がしっかり、弥生土器出土地帯に変容。進出した人々が、 定着したことを示す。 大宮台地は氷川神社の超密地域で、その主祭神を祭る種族が進出したことを示す。
- この時期に、関東より北の東北地方へも、人々が進出したものと考えられる。弥生後期の土器である天王山式土器とアメリカ式石鏃が、北関東から東北地方に広がる。

✓北陸・越後の高地性集落の応援に駆け付けた集団の土器・鏃

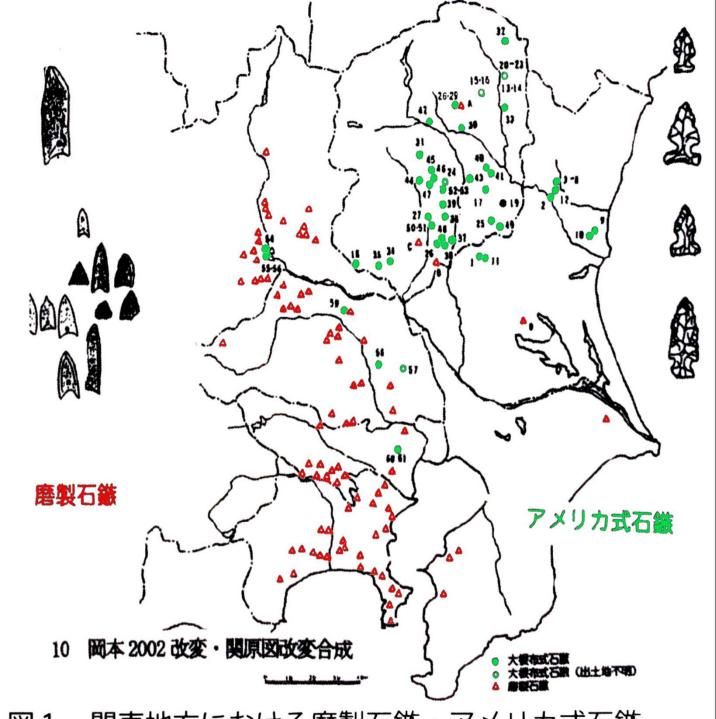


図1 関東地方における磨製石鏃・アメリカ式石鏃 の分布(岡本 2002改変・関原図改変合成)

### 出雲族のアメリカ型 石鏃の関東から東北 へ 広がる

「邪馬台国時代の関東」 石 野博信編の

- ・ 「2・3世紀の近畿から見た関東」森岡秀人著にアメリカ式石鏃の分布図がある。
- ・ この関東の分布図と前 頁の東北の分布図をつ なぐと、アメリカ式石鏃 の全体の分布が判る。
- ・ 氷川神社の分布と北陸・ 越後の高地性集落の分 布を更に重ねると、出雲 族の北関東から東北・ 越後までの進出状況が 明確になる。

# 東北系(天王山式)土器と (アメリカ式)鏃





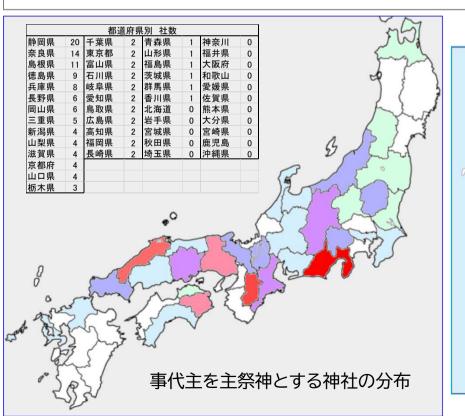
図72 アメリカ式石鏃の分布 (石原正敏原図)

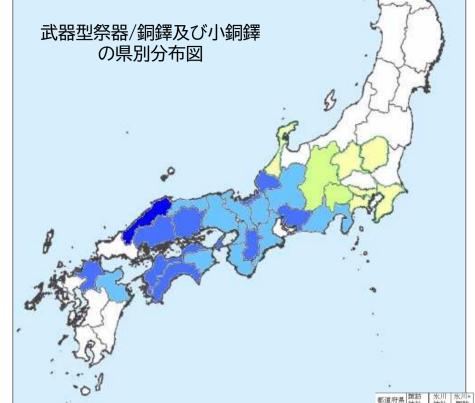
- 甘粕 健著 「越後・会津の情勢」(倭国大乱と日本海)より
- 越後平野で北陸系と共存した東北系の天王山式土器は、さらに東部北陸の中心地域能登半島と富山湾沿岸の分布を広げています。 (中略)東北の弥生時代の所産である石鏃の基部にえぐりを入れて逆T字形にしたアメリカ式石鏃の分布からもうかがえます(図 72)。この二つの分布図を見ると、東北系の人々が越後平野から海路によってダイレクトに富山平野や能登半島と往復していることがうかがえます。
- ・ 東北系の土器は(中略)能登中枢部の高地性集落杉谷チャノバタケ遺跡の勘合からまとまって出土した(中略)橋本澄夫さんは東北 系の集団が応援部隊として加わった可能性を指摘しています。
- ・ 上記の記述から、切迫した建御名方神の逃避行を支援するために会津の部隊が動いたことは、会津が出雲系の有力な支配地であったことが判ります。

### 出雲の勢力圏

# 青銅器埋納の分布図と出雲系主祭神の神社分布図

- ・ 青銅器埋納は、出雲族の分布を示す。
- ・ 大国主命を主祭神とする氷川神社と、子の建御名方神を 主祭神とする諏訪神社の分布、そして、同じく子の事代主 を主祭神とする神社の分布は、出雲族の勢力範囲を示す ものと言える。
- · 青銅器埋納の分布図と出雲系主祭神の神社分布図の両 方から、出雲族の勢力範囲が推定できる。
- ・ 北九州から、東北までの広い範囲が出雲圏であったことに驚く。







### このダイナミックな出雲族の支配地拡大はどうやって行われたのか?

- ・ 武器型青銅器・銅鐸などで出雲族の支配地域を推定した。
- 勾玉/管玉の製造・流通ルートの発展を段階ごとに示した。
- 土器形式から、
  - ・関東北部では西方から別の土器形式が侵入する。
  - ・ 関東地方への尾張・三河の土器が海岸沿いに侵入し、北上する。
  - ・更に太平洋側では、東北地方から別の土器形式が南下する。
    - ✓ この土器の移動と神社の分布はリンクしているように見える。
- 歴史学の中では、考古学の取り扱う遺跡・土器・遺物などを、沈黙史料と呼ぶ。
  - 人間が大地に残した痕跡・活動の産物は、事実を証明するが、それ自体は、語らない。
  - ✓ 発言史料:文字・文章で記された「文献史料」。 これが人間の活動を語る。
- ▶ 支配地域が判っても、話が、ピンと来ない。
  - 発言史料を使って、人の活動の物語:ストーリーを語ります。
    - 沈黙史料がストーリーを豊かに彩ります。具体的に、
  - 歴史としては、人の名前が入り、何を目的とし、何を生業として、支配地を拡大したのか、そんなストーリーが欲しい。 古代史・神話の時代と言えども。
  - 建御名方神・奴奈川姫・大国主命・などから、語ります。

## 古事記・沼河比売(奴奈川姫)の段

古事記 現代語譯 古事記 稗田の阿禮、太の安萬侶 武田祐吉訳

### ヤチホコの神の歌物語

――長い歌の贈答を中心とした物語で、

もと歌曲として歌い傳えられたもの。 ——

このヤチホコの神 (大國主の命) が、越の國のヌナカ 八姫と結婚しようとしておいでになりました時に、そのヌ ナカハ姫の家に行つてお詠みになりました歌は、

ヤチホコの神様は、方々の國で妻を求めかねて、 遠い遠い越こしの國に賢かしこい女がいると聞き 美しい女がいると聞いて結婚にお出でましになり 結婚にお通かよいになり、

大刀たちの緒おもまだ解かず羽織はおりをもまだ脱ぬがずに、娘さんの眠つておられる板戸を押しゆすぶり立つていると引き試みて立つていると、青い山ではヌエが鳴いている。野の鳥の雉は叫んでいる。

庭先で二ワトリも鳴いている。

腹が立つさまに鳴く鳥だなこんな鳥はやつつけてしまえ。

下におります走り使をする者の事ことの語かたり傳えは、かようでございます。

そこで、そのヌナカハ姫が、まだ戸を開あけないで、 家の内で歌いました歌は、

ヤチホコの神様、

萎れた草のような女のことですから

わたくしの心は漂う水鳥、

今こそわたくし鳥でも

後にはあなたの鳥になりましよう。

命長くお生き遊ばしませ。

下におります走り使をする者の事の語り傳えはかようでございます。

青い山に日が隱れたら

眞暗な夜になりましよう。

朝のお日様のようににこやかに來て

コウゾの綱のような白い腕、

泡雪のような若々しい胸を

そつと叩いて手をとりかわし

玉のような手をまわして

足を伸ばしてお休みなさいましようもの。

そんなにわびしい思いをなさいますな。

ヤチホコの神様。

事の語り傳えは、かようでございます。

### 出雲族の支配地拡大

- 細型の銅矛/銅剣は実用性が有った。
- 弥生中期には、中細型銅矛/銅剣になり実用性を失い、大きく、金色に輝く目立つものとなった。
  - 出雲族は、それを旗印として武力侵出を行い、瀬戸内に支配地を広げ、対岸の四国へ支配を広げた。
  - 更に、金色の武器型青銅器を旗印に、瀬戸内海沿岸全体に支配地域を広げ、北九州にも広げた。
  - 山陰側から近畿更に北陸まで拡大。瀬戸内側から大阪・奈良・京都・滋賀など畿内に拡散。愛知まで拡散した。
    - この拡大路線では、金色の武器型の旗印では無く、やはり金色の銅鐸をシンボル(祭器)として使い、武力制圧の度合いを弱め、拡大作戦を広げた。
- 支配地域の拡大と維持のために、旗印として祭器として青銅器を使ったが、その生産は北九州の天孫族に依存した。 出雲族としては、対価となる高価なものが必要であった。
  - そのために、天孫族の好む勾玉・管玉の生産を拡大し、日本海側の支配地域で効率的に生産し、流通経路を整備した。
- 大国主命が出雲族の盟主になると、
  - 支配地域のさらなる拡大めざした。 ・ 北陸から越後・東北へ進出。
    - 滋賀から尾張の地域の支配を固め、東海から関東へ拡大。
  - 大国主命は、支配地を確実にするために、政略結婚を行い、各地の豪族の娘を妃にし、子供・子孫をその地の主に据え、生涯で180人の子供を設けた。
  - 政略結婚から埋めれた子供の中から、領地拡大と支配を行う片腕になる者が生まれて来た。
    - 北九州の味耜高彦根神、鳴海神、事代主であった。
  - 金色の青銅祭器を大量に入手するためにも、勾玉の生産拡大は必須だった。
    - 勾玉の原石ヒスイの産地は糸魚川付近に限られていた。
    - その産地に聡明な奴奈川姫が居ることを知り、大国主命は求婚をした。

### 出雲族の支配地拡大

- 北陸を中心とした勾玉・管玉:宝石の集積地と日本海ルート
  - 奴奈川姫が妃となったことで、ヒスイの原石が供給され、優れた加工技術が出雲族に伝わった。
    - 管玉の原石の供給地も開発された。
  - 吹上遺跡や吉崎・次場遺跡などでの勾玉の増産が可能となり、供給体制が整った。
  - 北陸・青谷上寺地・出雲・北九州までの「弥生の宝石の日本海ルート」が確立した。
- 大国主命は、北陸から、南に、東に支配地の拡大を計った。
  - 若狭から滋賀→尾張→東海→伊豆→房総→武蔵
  - 北陸から頸城郡→越後→会津→常陸→下長
    - →科野→上野→埼玉
    - →諏訪→甲斐→相模
    - 支配地拡大には、子の味耜高彦根神・事代主・鳴海神達が尽力した。
      - 東国各地の神社の主祭神・祭神に上記の大国主命の子たちが成っている。
  - 奴奈川姫との間に子・建御名方神が生まれた。
    - 建御名方神は育つにつれ、大国主命・事代主と共に、諏訪などの征服や東国の支配に役を担った。
- 出雲族は、
  - 全国支配を達成(九州の一部は、天孫族が支配)
  - 各地の支配層(神)は、旧暦の10月に出雲に招集された。 (江戸時代の参勤交代を思い浮かべる)
    - 各地の人と物が一堂に会することにより、情報・技術・風習・産物が日本全国は広がった。
    - 「弥生の宝石の日本海ルート」は価値が高まったと推定。
  - 大国主命を補佐し、全国支配するものとして、味耜高彦根神/事代主/建御名方神が主要メンバーとなった。

### 出雲族と天孫族

- 北九州で君臨する天孫族と、全国支配を実質的に行いつつあった出雲族の関係は、微妙だった。
  - 神話では明確な戦争の話は出ないが、遺跡からの出土物からは戦争が行われたと見える。
- 出雲族が、天孫族の支配地を侵略する事態が生じ、和解策が模索された。
  - 天孫族の中心地であった須玖岡本遺跡周辺が出雲族の手に落ちた。
  - 政略結婚:直系の天火明命が大国主命の娘と高天原で結婚し、出雲族の地へ。名を饒速日命と変更。
  - 天菩比神が、天孫族の使者として出雲に来たが、大国主命の娘と結婚し、出雲族に加担。
  - 天若日子も、天孫族の使者として出雲に来たが、大国主命の娘と結婚し、出雲族に加担。
- 天孫族:糸島半島へ移り、産業も復活し、武力の立て直しを行った。
  - 天孫族は、西小田・隈、吉野ヶ里側と連携して、北九州に居た出雲族との大決戦を行った。
  - 青銅器の埋納と戦傷遺跡から、多数の死傷者を出しながら天孫族が勝利したと推定される。
    - 味耜高彦根神の消息を失せ、妹の下照姫(高比売命)の悲しい話だけが残る。
    - この戦いが、魏志倭人伝に記される倭国乱(倭国大乱)と推定される。
      - このような大規模な戦争は、戦争遺跡から判断して、外には無い。
- 天孫族は、北九州での決戦に勝った余勢を駆って、出雲へ行き、降伏と国譲りを迫った。
  - 大国主命と事代主は、負けを認め、国譲りに賛成した。
    - 建御名方神は、負けを認めず、力比べ(戦争)を挑み、緒戦で大敗した。(青谷上寺地遺跡の惨殺)
      - 天孫族軍の建御雷神に追われ、建御名方神は北陸に逃れた。
      - 北陸・越の出雲族は、天孫族軍とのたたかいに備えた。

天孫降臨に関しては、王墓遺跡の場所/時代の変遷や三種の神器の副葬地域の分布、糸島半島の遺跡・出土物などの詳細検討及び、記紀の記載内容との対応などの検証がら糸島半島と推察できるが、時間の都合で省くことにする。

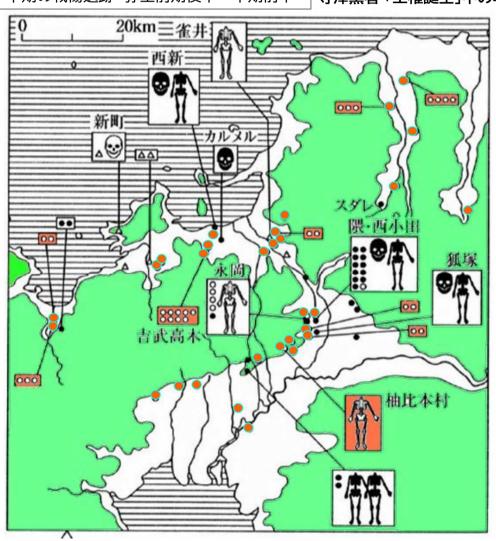
### 戦争遺跡と出雲族と天孫族

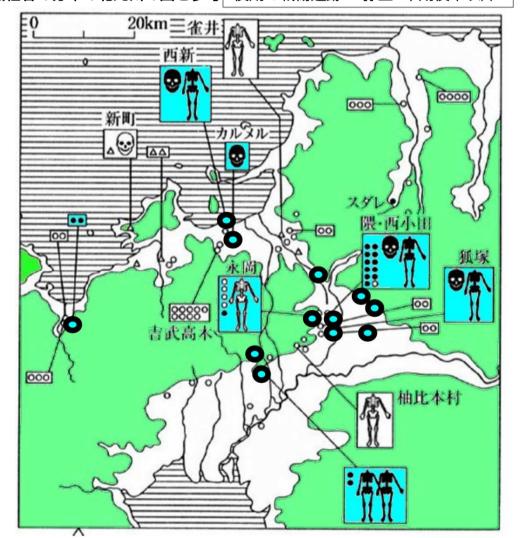
- 弥生時代開始以降、主に北九州で戦争が勃発し、弥生前期後半以降、激しい戦争があったことが遺跡で判明。
- 弥生前期後半~中期前半の中期では、お互いに、勝ったり負けたりした様子が覗える。
- 後期の戦いでは、三種の神器を副葬する地域=天孫族が勝を納めたと推定できる。

中期の戦傷遺跡 弥生前期後半~中期前半

寺澤薫著「王権誕生」中の戦争犠牲者の分布の北九州の図を参考 後期の戦傷遺跡

後期の戦傷遺跡 弥生 中期後半以降

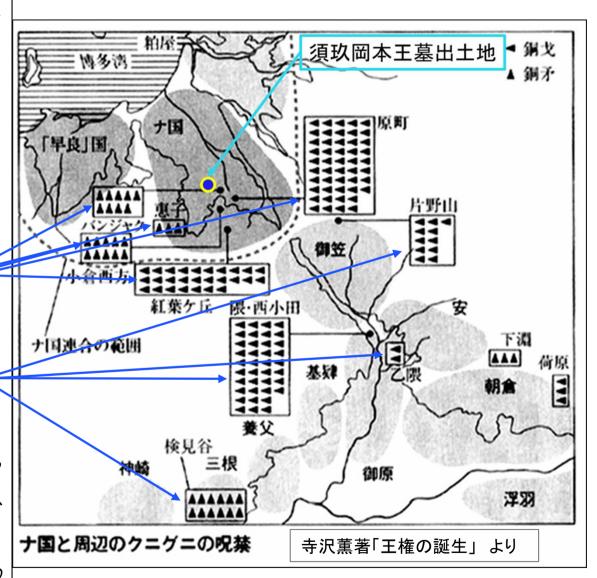




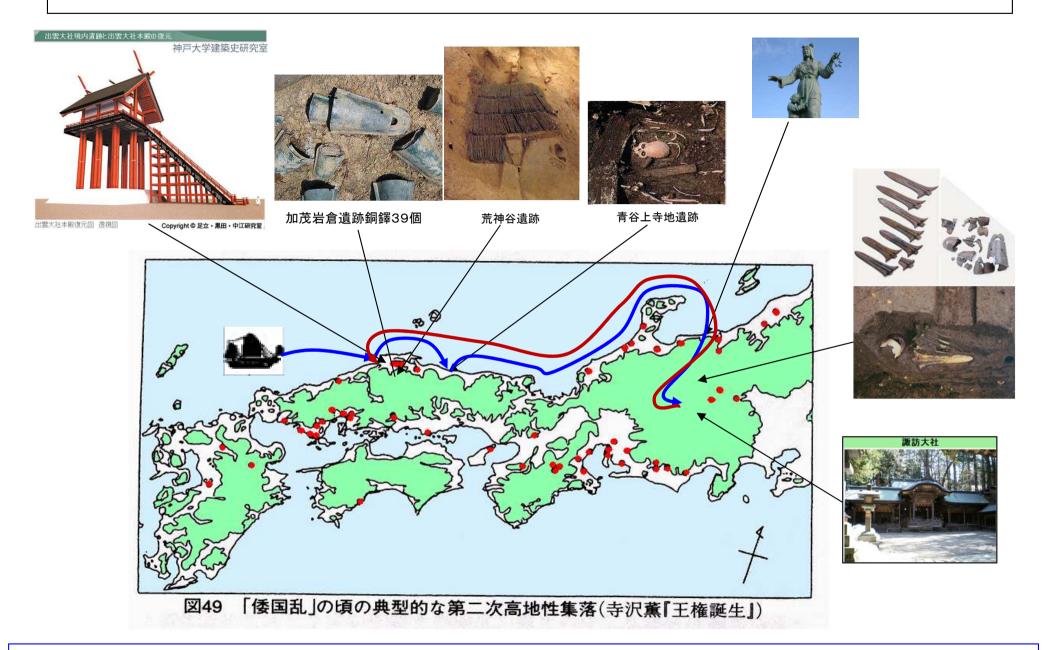
### 青銅器埋納は戦争勝者が敗者の旗指物・祭器を地中に埋めた

#### 「青銅器埋納」: 埋納の解釈

- 戦争に勝利した側が、敗者の政治支配のシンボル(祭器)であった青銅器を供出させ、 二度と使えないように、地面に埋めた。
- 遠隔地の敗者には、祭器の保持を禁じ、埋めることを強要した。
- 埋める場所は、
  - 人が入らない山中・山麓など。
  - 須玖岡本の場合は、味方の祖先の大王の墓に報告した後に、山中に埋めたものとみる。
    - 青銅器の生産された地域に戻したと もみられる。
  - 戦利品として持ち帰り、報告のためお披露 目をした後に、埋納。
- 青銅祭器は、出雲族の祭器・旗指物
- 埋納は、丁重に行われた。敗者のものとは言え、神事に 使われたもので、勝者(他者)が雑に扱えば、敗者の側の 恨みがのこり禍根となるため。
- ・ 出雲の荒神谷・加茂岩倉両遺跡の大量埋納は、敗者の 祭器・シンボルを埋めたと理解される。



### 出雲の国譲りの伝説と遺跡



受傷人骨から弥生時代には、限定した地域で戦争があったことが判り、戦後処理で青銅の武器・銅鐸が埋納されたことを考えると、出雲国譲りと遺跡・遺物との関係が、信憑性を帯びてくる。

### 古事記の出雲国譲りの記述

- 出雲の国譲りの使者として、建御雷神を選定、天鳥船を添えて遣わした。
- 大国主命は、了承。子の事代主も了承。子の建御名方神が異議を申し立てた。
- 建御名方神は、力競べを望み、建御雷神に手を取られ負け、逃げた。
- 建御雷神が
  - 「追い往きて、科野國の州羽の海に、迫め到りて、殺さむとしたまひし時」
  - 建御名方神が言った。

「我をな殺したまひそ。」

殺すな!

「この地を除きては、他處に行かじ」

諏訪に蟄居する!

• 「葦原中國は、天つ神の御子の命の随に献らむ」

国は譲る!

- 北九州に残る多数の戦争遺跡と考慮すると、現実には、武力抗争・戦争があったものと推測する。
  - 建御名方神の差配する日本海弥生の宝石のルートの拠点である青谷上寺地遺跡には、100名以上の惨殺の遺物が遺る。
    - 建御雷神軍が、建御名方神の拠点を襲い、緒戦を制したものと推測
  - 諏訪湖までのルートを、以下をもとに検討する。
    - 戦争遺跡/高地性集落など
    - 土器・玉作り・鏃などの遺跡
    - 建御名方神·奴奈川姫の伝承
    - 神社の主祭神や伝承
    - 地形

## 青谷上寺地遺跡



- 弥生時代は日本海に面し、長い入江があり、 優れた港湾で、周囲には水田が広がる処。
- 湿地帯であったことが上手く幸いして、遺物 が保存され、現代に残った。
  - 住宅跡/杉の大板/様々な木製品・道具 /釣り具/籠/木製容器/土器/玉造関連 の道具/鉄製工具類など。
  - バラバラな人骨が100体以上(傷付け) られた骨が100点以上)青銅製の鏃。 戦争遺跡
  - 弥生人の脳が残存
- この遺跡は、水田に囲まれ、玉製品を生産し、 日本海の宝石の流通ルートの拠点であったが、 戦争に巻き込まれ人々が虐殺され、集落が崩 壊したと見られる遺跡。
- 遺跡の人骨からDNAが検出され、
  - 現代日本人に近い遺伝傾向が示され
  - 個体間のバラつきが大きい
  - 外部集団と関わりがあり、ヒトの流入 が多かった
  - 母系mtDNAでは、弥生系が多かった。

第四紀学会誌より 「青谷上寺地遺跡の周辺 域の弥生時代の景観史」 安昭炫著より

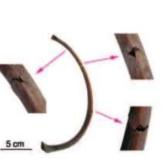
鳥取市教育委員会発行のパン フレット2種より借用

- ①青谷上寺地遺跡
- ②青谷上寺地遺跡のひとびと

#### 溝に散乱する殺傷人骨

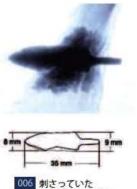


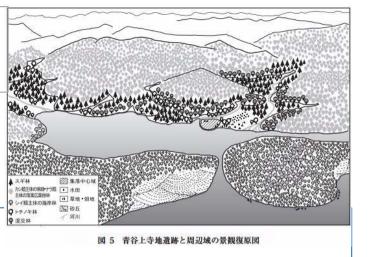
001 人骨が出土した溝の発掘の様子



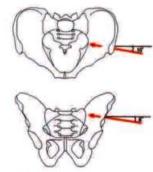


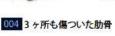
銅鏃の刺さった寛骨 (ほぼ前方から見たもの)



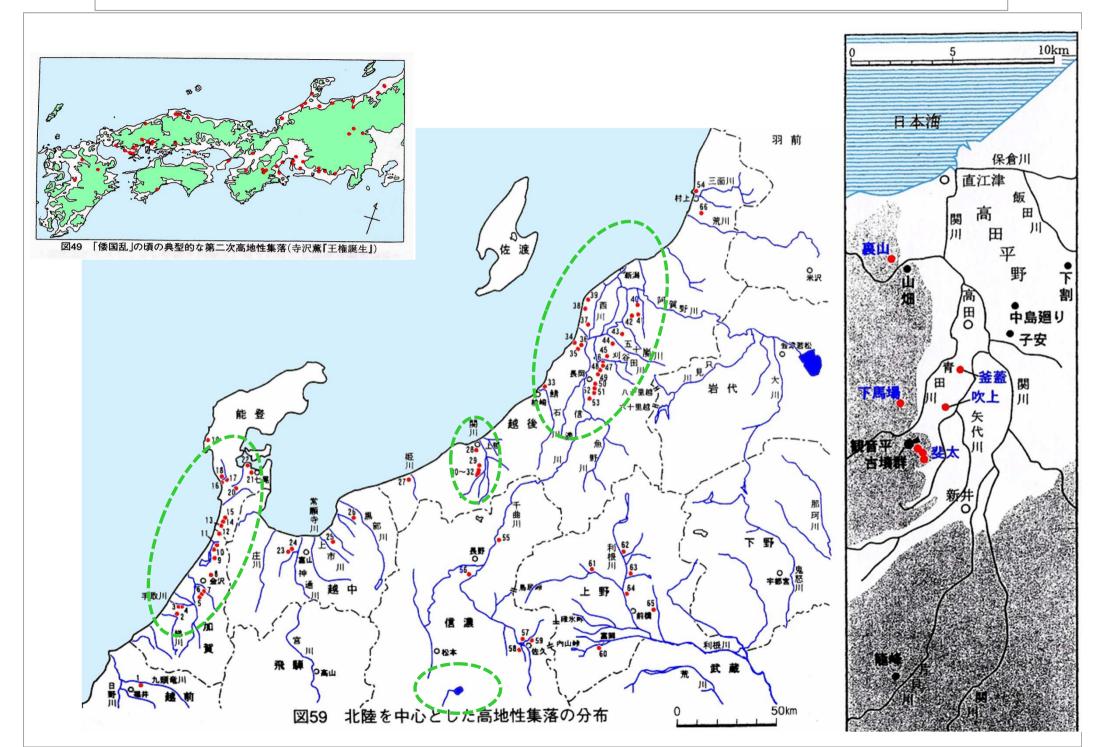


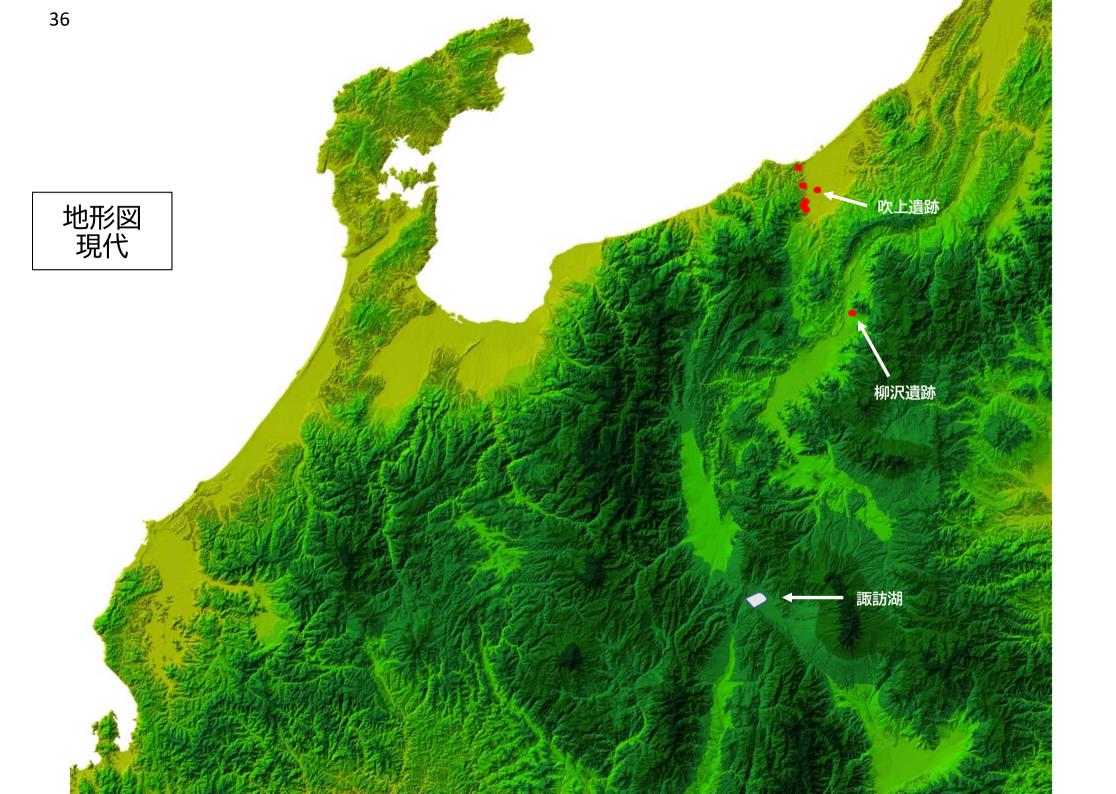


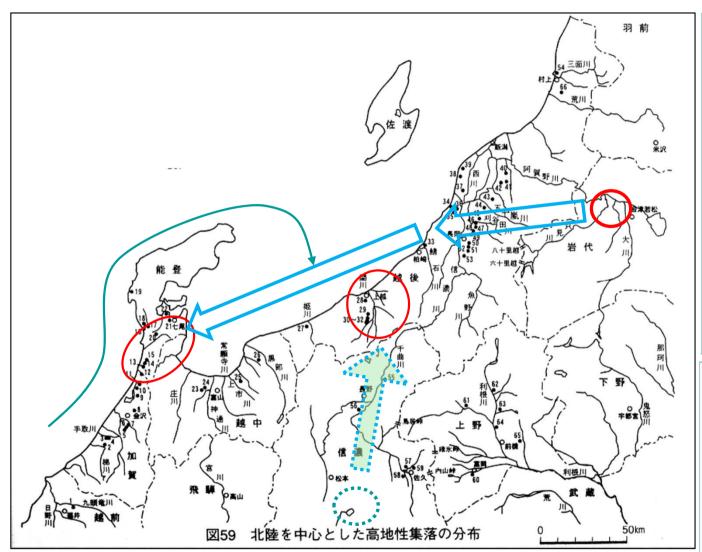


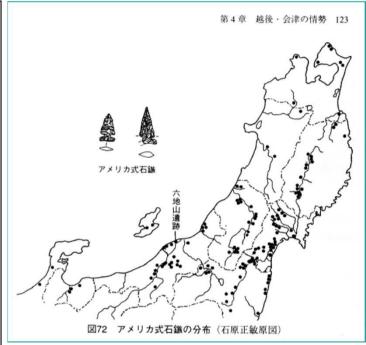


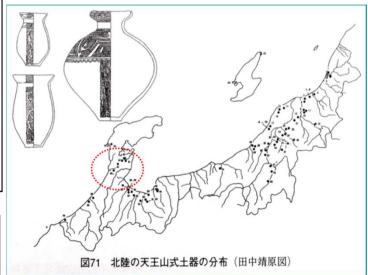
### 高地性集落:戦争への備え 倭国大乱と日本海 甘粕 健編から







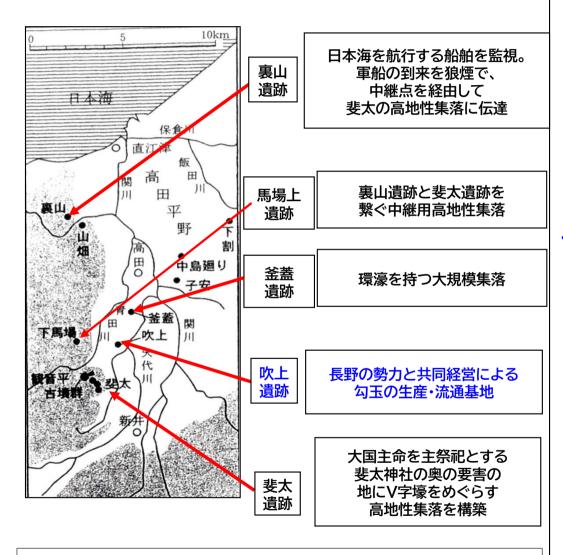




✓ 建御名方神の為に立ち上がったのは、北陸・越の民だけでなく、東北 の会津から、天王山式土器とアメリカ式鏃を持った人々が駆け付け、 高地性集落の構築と駐留に役を担った。

### 吹上遺跡と高地性集落斐太遺跡

(甘粕 健著「倭国大乱と日本海」 第4章越後・会津の情勢 を参考に)



長野県辰野市の矢彦神社には、大国主命/子・事代主/子・建御名方神が、諏訪を攻め取るために来たが、諏訪が手ごわいため、兵力を集めてから、攻め入ったとの伝承がある。

#### 吹上遺跡:玉作集落

- ・ ヒスイ製の勾玉と緑色凝灰岩の管玉を主力
- ・ 生産当初より洗練された技術を保有
- 大量生産のための効率的生産体制
- 当初は北陸系土器が主体(8割)
- 末期は信州系が7割 北陸系3割

ヒスイ原石の産地: 糸魚川から原石と加工技術を得て、北 陸系の人々が中心に、玉作り工場を作った。

ある時期から、信州系の人々を招来し、その人々が主体となったと見える。

- 大国主命は奴奈川姫の協力を得て、玉作りを進め、 吹上遺跡をヒスイ勾玉の一大拠点とした。
- 信州を支配下に置くと、工人として優れた資質を 持つ信州人を勾玉大量生産の担い手とした。

#### 天孫族軍の出雲への襲来と建御名方の敗戦の報が伝わる。

- 吹上遺跡近くの斐太神社の裏山に高地性集落(延長 900mの環濠含む)を築造。
- 海岸線を見る高地性集落から中継一ヶ所を経て、襲来 情報入手の段取りを備える。
- 斐太高地性集落から出土するのは、殆どが北陸系。
  - 信州系の土器は無い。
- 長野から来た者(技術者)は、吹上を離れ、信州にも どったと見られる。
  - 裏山遺跡も斐太遺跡も、実際に戦闘が行われた 形跡はない。
  - 吹上遺跡は、廃止された。
- その後、信州人は、この地域には、戻らなかった。(信州系土器の出土状況から)
- この地域の高地性集落は、一時期に構築・廃止された。
  - 建御名方神を支援のために築かれたと考えられる。

## 吹上遺跡







## 裏山•斐太遺跡

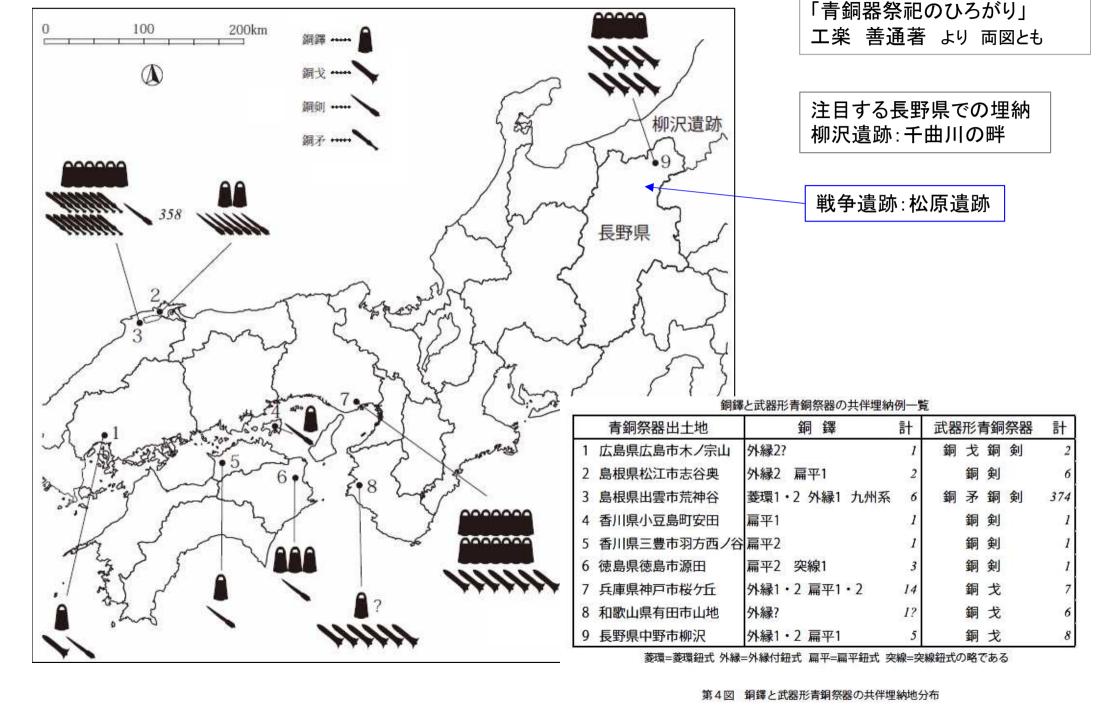




### 長野県にも埋納の事例があった

長野県埋蔵文化センター発掘

調査報告書100中野市柳沢遺跡



### 注目する長野県での埋納:「銅鐸と武器が同一箇所から」



銅鐸6個と銅戈16本が供伴 島根県神庭荒神谷遺跡 (島根県教育庁埋蔵文化財調査センター提供)





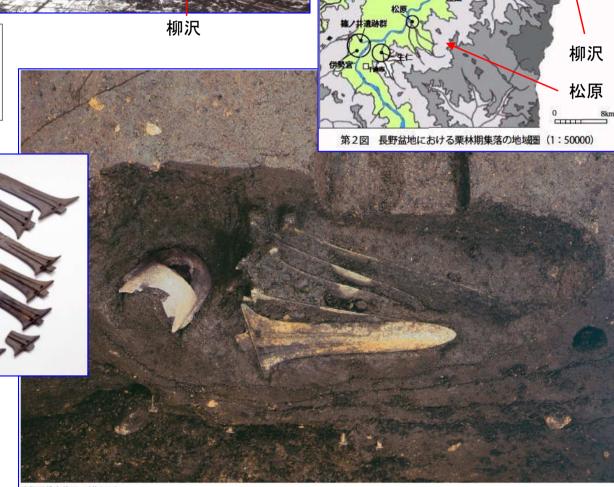
銅鐸2個と銅戈6本が供伴 島根県志谷奥遺跡 (島根県教育庁埋蔵文化財調査センター提供)





長野県埋蔵文化センター 発掘調査報告書100 中野市柳沢遺跡 2012.3 より

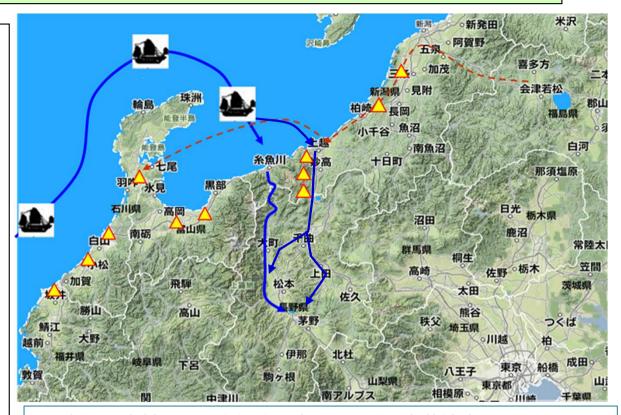




青銅器検出状況 (北から)

### 建御名方神を追撃したルートの推測

- ・ 建御名方神は、出雲で異議を申し立て
  - 争いとなり、緒戦で敗れた。
- ・ 九州・出雲の情報や建御名方神が出雲へ 往ったとの情報が伝わり、(建御名方神が 命じて、)越の国近辺に緊張が走った。
- いち早く、会津から部隊が越後から北陸まで、応援に駆け付けた。
  - 八日市・羽咋・邑知などで高地性集落 を築造し、兵を配備。
  - 能登半島の付け根部分には、地溝帯があり、西側には邑知が広がり、地溝帯は、1800年間の土砂に埋まる前で、低湿地で河川・運河が築かれ、舟で横断できたとの説がある。
  - この潟と河川・運河で結ばれた邑知 地溝帯の両脇の高地には、高地性集 落が並ぶ。
  - 上越・妙高側には、海岸線を見張る裏山高地性集落があり、狼煙は馬場上 遺跡を経由して、直ちに斐太遺跡に 伝わり、吹上の玉作集落に伝わる。
- 一方、糸魚川沿いは奴奈川姫所縁の地で、 ヒスイの産地があり、古来からの塩の道で 安曇野を通り、塩尻峠を越えると諏訪に入 るルートに繋がる。



- ・ 建御名方神は、羽咋気多大社から邑知地溝地帯の近道を通り、 母・奴奈川姫を伴い、少人数で、糸魚川に行き塩の道ルートで諏 訪に向かったと推測。
- ・ 能登半島を回って、急行したした建御雷神軍に追いつかれ、・ 奴奈川姫は、、建御名方神を先行させ、囮となり、別ルートに誘導し、入水自殺した。
- 建御名方神は、安曇野を抜け、諏訪に入った。
- ・ 建御雷神軍の本隊は、嶮しい塩の道を通らず、直江津から妙高を通り、長野盆地を経由して、諏訪へ向かった。
  - ・ 裏山・馬場上・斐太の高地性集落は、機能したが、建御雷神軍は、影響を受けず、通り過ぎた。
  - ・ 千曲川沿いの各地では、戦乱があり、出雲方の印である 銅鐸武器型祭器などが埋納された。

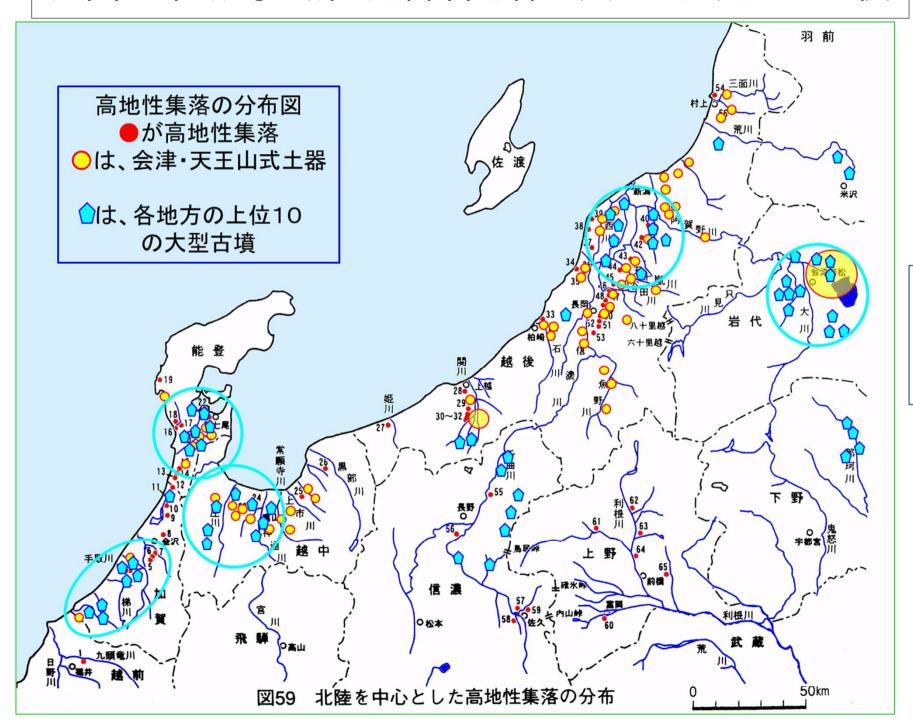
## 日本書記:「矛」の記述

- 福永武彦訳 現代語訳 日本書記より 31 高天原の使いたち・国譲り・高千穂峰・鹿葦津姫(本文)より
  - 事代主が国譲りに了承したとの報告を聞いて、大国主命は、「私の頼みにしていた子も、そう申して姿を隠しました以上は、私も国をお譲りすることといたします。もし私が防ぎ戦うようなことがあれば、国の中の神々も、きっと一緒になって防ぎましょう。今、私がお譲りすると決めれば、誰もあえて刃向かう者はございますまい。」 このように言った。
    - その上、かって国を平定した時に突いていた幅広い矛を、二柱の神に与えて言うには、 「私は この矛を用いて、ついに事を為しました。天孫も、この矛を用いて国を治めになれば、必ずや事が うまく運びますでしょう。
    - 今は私は、百足らぬ八十の、曲りくねった道を訪ねて、黄泉国(よもつくに)に身を隠すことにいたしましょう。」と言い終わると、ついにこの世を去った。
    - そこで二柱の神は、荒びた神々や、また草や木や石の類を処罰して、すべて平定した。(中略)ついに高天原に戻って復命した。
- 矛を収納して、国譲りが終了したことを、日本書記では記している。
  - この矛の処置の仕方についての記述はないが、埋納された状況から青銅の武器は、この国譲りの終焉を示すものと見ることができる。
    - 記紀と考古学の発掘成果が一致した。
- 青銅器の埋納が、国譲りの第一の現場の出雲地方だけでなく、長野県でも出土してことは、記紀の記述する 国譲りが実際にあったことを示す。
  - 戦争の実際に行われなかった地域でも、埋納が行われたのは、二柱の神と天孫族が外の地域も征討したこと、または、出雲方の神々が、自発的に武装解除した結果と考える。

### その後のこと

- 出雲方が戦争で負け、天孫族に降伏し、出雲の国が譲りがあったならば、
  - 負けた出雲族とそれに加担した人達は、滅び、消滅したのではと懸念される。
    - 現実には、旧出雲族とその加担者は、その後も、各地で栄え続けたように見える。
      - 不思議?!
- 出雲の国譲りの直後に行われた神武東征の結果、大和朝廷が成立した。
  - これは、出雲に勝った天孫族がトップとなって支配する体制が確立したとの見方も多い。
    - 現実的には、初代天皇神武の正妃は、出雲方の事代主の娘次代天皇綏靖の正妃は、同じく事代主の娘 三代天皇安寧の正妃は、事代主の孫娘
    - 神武と大和で戦った饒速日命の子:天香具山命と宇摩志麻遅命の子孫達は、
      - 大和朝廷の最高執政官(首相級)の役職に就き
      - 娘たちは、天皇家の正妃となったものを輩出
    - 饒速日に同行して大和に来た物部一族は、主要な豪族として活躍した。
  - 北陸・越後・科野の地方では、
    - 高地性集落と築き、争ったはずの地域/人々が、そのまま栄えて、古墳時代には、大きな古墳を築いたように見える。
    - 建御名方神に由来する諏訪大社は存続し、その支社である諏訪神社は、長野県だけでなく、新潟県に も多数(最も多く)存在する。

### 大国主命・奴奈川姫・建御名方神を支えた人達のその後



倭国大乱 と日本海 甘粕健編 の図に着 色・マーク をした図